

■「ミニマルミュージック」風な音楽の制作

(制作指導:石井拓洋)

【学ぶこと】

●音楽スタイル面

- 多数の短い旋律のループが織りなす「ミニマルミュージック」風な、あるいは「テキスタイル」な音楽
- 米国70年代ミニマルミュージックの音楽スタイルの音感をつかむ(スティーブ・ライヒ Steve Reich, 1936- , 米)
- 旋法によってかもしだされる音楽の趣を活かす
- 「音域」や「音色」の時間軸での配置構成の妙 (基本的な音楽の構成方法、「モコモコ」から「シャキシャキ」へ)

●"Logic" の技術面

- エフェクターの使用 (主に、ディレイ, リバーヴ)
- コンティニューアスデータの使用方法

【「テキスタイルな」、又は「ミニマリスティック」な音楽の制作手順】 (※ 最低4パートを作りたい, リアルタイム入力)

1. 「映像の読み込み」

2. 「スケールの指定

- 音階 「Dリアン・スケール」を使用する。D音から開始する「Dリアン・スケール」。
Why? → 響きの調和を得るため (織物に例えるなら、基本となる「色調を調和」させるため)。

「Dリアン・スケール」= D E F G A B C (D) (※要するに、レから開始されるピアノの白鍵のみの音階)

- まずは、「Dリアン・スケール」の音階に含む「全ての音」を一度に和音として鳴らして、その「響きの世界観」をつかむ。その「世界観」を感性でとらえる。

3. 第1パートの作曲 「響きの世界観を感じながら、2小節の短いフレーズを作る」

- なるべく「低い音域」でつくる
- 【重要な指定】 フレーズの「最初の2音」は、必ず 「レ→ラ」 or 「ラ→レ」とする。
Why? → 「Dリアン・スケール」の「世界観」を活かすための工夫
- 他のパートとの関係性を生かすために、休符も意識している。
- 特に、B音(シ)の音がかもしだす雰囲気を大事にしたい。

4. 「映像の長さにあわせて、フレーズをループさせる」

5. 第2パートの作曲 (スケールは守る。レ→ラ or ラ→レは不要)

- 基本、5小節目から
- 1パート目よりも高い音域で。音色も考える。
- 映像分の長さをループさせる
- リズムの工夫として「アフタクト(弱起)」の使用を考える

6. 第3パートを作る (+エフェクターの使用, ディレイなど)

- 基本、9小節目から
- 2パート目よりも高い音域で。音色も考える。
- 映像分の長さをループさせる
- アフタクト

7. 第4パートを作る (+エフェクターの使用, ディレイなど)

- 基本、13小節目から
- 3パート目よりも高い音域で。(音色も考える。例えば "Pad" と名付けられた音色名を選ぶとよい)
- 持続音

8. 最後に時間軸全体でのフレーズの「織りなし」を調整する (「ミュート」、「コンティニューアスデータ」などの使用)